

## 学生大使 実施報告書

氏名：二瓶梨紗子

学部・学科（コース）・学年：人文社会科学部・人間文化コース・3年

派遣先大学：ガジャマダ大学

派遣期間：2023/08/29～2023/09/13

### 1 日本語教室での活動内容

日本語教室は1日2回、午前は10時～11時半、午後は13時半～15時に開講された。担当する学生は1～3人程度で、それぞれの日本語レベルがバラバラであることが多かった。

初級者に対しては、50音表をある程度教えた後に、ひらがなカルタやパズルを用いながらゲーム形式でひらがなを覚えてもらった。「す」や「つ」の発音に苦戦する学生が見られ、昨年のプログラムでベトナム人学生がつまづいた点とほとんど同じであることに気づいた。そこで、意識的にゆっくりと丁寧に発音したり、発音してもらう回数を少し多めにしたりするなどの工夫をした。

中級者に関しては、スピーキング能力が高い一方で、ライティングに自信がない学生が案外多かった。そのため、ひらがなや簡単な漢字の読み書きを練習してもらうことにした。「とめ・はね・はらい」や線が突き出る部分、間を空けるべき部分などが曖昧になることが多々あった。しかし、自ら間違いに気づいたり、他の学生と誤りを指摘し合ったりすることで正しい字を書けるようになっていった。これは初級者にも共通していることであるが、概して吸収するスピードが速く、その上達具合にはただただ驚嘆させられた。

### 2 日本語教室以外での交流活動

日本語教室以外は基本的に自由時間であった。ゲストハウス付近のコンビニやスーパーへ買い物をしに行ったり、現地の方々と夕食を食べに行ったりした。また、週末は海やジョグジャカルタの有名な観光地に連れて行ってもらい、非日常的な体験ができた。時には現地の方々と非常にプライベートな話をし、友人として本音で語り合うこともあった。話せば話すほど、何に悩み、喜び、怒るのかを理解し合い、「人間くささ」を互いにさらけ出しながらコミュニケーションを取っていたと思う。こうした何気ない時間を振り返ると、国境や文化を超越した交流ができていたように感じる。

自由時間の中で特に印象に残っている体験は、インドネシアのホラー映画を鑑賞したことである。現地の映画館には多くのホラー映画のポスターが掲示されており、そこで初めて、インドネシア人がホラームービー好きであることを知った。ジャパニーズホラ

## 【学生大使 実施報告書】

一ともウエスタンホラーとも異なる演出や雰囲気などは、刺激のかつ新鮮に感じられた。インドネシア人の感性に触れることができた、貴重な体験であったと思う。

### 3 参加目標への達成度と努力した内容

ベトナム派遣時は、期間が短かったことや集団で行動せざるを得ない場面が多かったことから、個人間で深く交流する余裕がなかった。そこで今回は、現地の方々と深く交流することを目標とした。目標達成のために、他のメンバーに迷惑を掛けない範囲内で個人行動を取ることに挑戦したり、フットワークを軽くして誘いを受け入れたりすることを心がけた。自分から積極的に話しかけ、相手に様々な質問を投げかけるようにすることにも努めた。こうした姿勢が功を奏したのか、とある学生の先生のご自宅にお邪魔することができた。渡航前から、現地に住む人々の生活空間を見てみたいと思っていたため、実際に訪問することができて率直に嬉しかった。また、上述したように極めてプライベートな話をする機会が多く、ベトナム派遣時よりも一層、個人間の対話を深めることができたと思う。このように個人的な関わりを築くことができたことから、今回の目標は100%達成することができたといえるだろう。

### 4 プログラムに参加した感想

前回の派遣では、プログラム再開直後だったこともあり、様々な局面で苦勞することがしばしばあった。それでも再び本プログラムに参加したいと思ったのは、詰まるところ、現地の方々との交流をまた楽しみたいという思いが、不安や躊躇いを上回ったからである。そしてやはり、この選択は正しかったと強く思えるほど、非常に充実した時間を過ごすことができた。

現代社会では、SNSを用いて世界中の人々と気軽にコミュニケーションを取ることができる。私自身も、SNSを利用して海外の友人とつながっており、便利なツールであると感じている。一方で、現地でインドネシア人の方々と音楽で共に盛り上がったり、一緒に美味しいものを食べたりすることなどを通じて、同じ体験を共有することの喜びや楽しさを改めて実感した。もちろん、SNSでコミュニケーションを取ることを否定するわけでは全くない。ただ、同じ時間・場所・モノを現地のみなさんと共有できることが、かけがえのない幸運な体験であると伝えたい。

### 5 今回の経験を踏まえた今後の展望

前回のベトナム派遣終了後、今後の展望について、語学力の向上を目指すと報告書で述べた。現地学生の高い英語力に触れた結果、この点は依然課題であると思われるため、今後も引き続き意識しなければならないだろう。

他方、今後は可能な限り多くの国を訪問してみたいと思う。就職活動や卒業研究などに取り組みなければならないため、実現は困難であろう。しかし、2度の海外派遣を通

## 【学生大使 実施報告書】

して、訪問先の国のこと、そして相手国が日本をどのように受容しているのかを知るには、現地に赴くことが最も効果的であると実感した。本プログラム参加の原動力である好奇心を常に持って、様々な国を訪れ、世界と日本をより深く知りたいと思う。

本プログラムへの参加は、私の大学生活に大きなインパクトを与えた。この2週間を充実させることができたのは、共に渡航した日本人メンバー、インドネシア人の方々、菅原靖先生をはじめとした国際交流課の皆さまなど、多くの方々によるサポートのおかげである。皆さまの多大なるご尽力に心より御礼申し上げたい。



日本語教室